企業研修における登山形態の違いが参加者の学習過程に及ぼす効果

The Effect of the Difference of Hiking Program in Freshman Training Camp on Its Outcome

○中川佳美（backcountry classroom Inc.）高山昌紀（Asobenture Life Japan）
太田拓野（Wilderness Medical Association Japan）岡村泰斗（backcountry classroom Inc.）

キーワード：企業研修、選択登山、Means-End、Experiential Education Evaluation Form

背　景

近年、企業の新人研修において、登山を取り入れた取り組みが開始されている。本研究は2012年度、2013年度に登山を新入社員研修に取り入れたX社を対象に、登山形態による学習過程のちがいを比較することを目的とした。

X社は、2012年度に長野県戸隠にてbackcountry Classroom Inc.（以下B.C.Inc.）の企画、運営、指導のもと、2泊3日の登山を含んだ新人研修を行った。ところが、登山中の軽微な擦傷からの感染が原因となり、研修後参加者の1名が長期入院を強いられた。その影響を受け、2013 年度の新人研修として、B.C.Inc.は、研修の効果を維持しつつ、登山道をできる限り使わずに、極力目に見える危険を排除した研修を提案するよう求められる結果となり、筑波山系を用いた2泊3日の登山研修を提案した。

研修内容

研修はいずれの年度もX社の求める社員像として、社会に対する「信義性」「積極性」「創造性」「行動力」「責任感」を養うことを目的とした。また、参加人数も2012年度21名、2013年度19名とほぼ同等であった。さらに、指導形態も6～7名に対し1名の指導者つく3班編制で同一の方法をとった。

2012年度の研修は、1日目午前中にASEを行った後、戸隠中社より戸隠キャンプ場まで徒歩で移動した。2 日目に高デッキ山を目指し、沢登り、やぶ漕ぎを行い、登頂後お仙水にてビバークを行った。ここで3日目の選択登山のコース選択を行い、選択コースに応じて登山班の再編を行った。3 日目はそれぞれの選択班の計画に基づき、ゴールの戸隠中社神告げ温泉を目指した。

2013年度は、1日目はつくばゆかりの森にて6時間のASEを行い、同所にてビバークした。2 日目はバスで加波山神社に移動し加波山から裏筑波までの縦走登山を行った。3 日目は朝3時にビバークサイトを出発し、筑波山女体山にて御来光登山を行った。その後御幸ヶ原にて下山路の個人別選択を行い、ゴールの筑波山神社を目指した。

それぞれのコースに共通する要素として「ASE」「集団登山」「選択登山」「ビバーク」「ふりかえり」の5つにプログラムを分類した（表1）。本研究は、実験的なアプローチとは異なるため登山形態のどの要素が結果に影響を与えたかは推察の域を超えないが、それぞれの登山形態を概観すると、2012年度は、4㎞のオフトレイルや、中級者レベルの選択登山が入るなど、全体として身体的、技術的な負荷の高い登山であった。一方、2013年度は、山行距離、標高差は高いものの、11.5㎞の林道や、初心者レベルの選択登山など、技術的、心理的な負荷は低いものであった。

表1．2012、2013年度プログラム比較

		2012年研修内容	2013年研修内容
プログラム	ASE	ASE2h	ASE6h
	集団登山	戸隠高原ハイキング3h 高デッキ登山（沢登り・やぶ漕ぎ）6h	加波山～筑波山縦走9h 筑波山御来光登山3h
	選択登山	お仙水～戸隠神告げ温泉7.5h ①怪無山/②飯縄山/③霊仙寺山	御幸ヶ原～筑波山神社2.5h ①筑波山神社/②奇岩/③つつじヶ丘
	ビバーク	戸隠牧場キャンプ場（1日目） お仙水（2日目）	つくばゆかりの森（1日目） 裏筑波男の川源流（2日目）
	ふりかえり	登山準備（1日目）1.5h 温泉 研修ふりかえり（3日目）3h	夜のふりかえり（1日目）1.5h 温泉 研修ふりかえり（3日目）2h
難易度		中・上級者	初級者
山行距離		17.5km(②コース)	19km(②コース)
標高差		1240m～1917m（±677m）	120m～877m（±757m）
登山道		オン12.5km/オフ4km/林道1km	オン7.5km/オフ0km/林道11.5km
選択登山		前日よりグループ再編/中級者	開始直前にグループ再編/初心者

評価方法

本研究では、登山形態の違いが学習過程に及ぼす効果を検証するために、Okamura(2013)が、Means-End 理論をもとに開発した、Experiential Education Evaluation Form：3E Form（ソフトウェア）を用い、「具体的な活動」「その体験の意味」「その体験から得られた効果」のつながりを示すヒエラルキカルバリューマップ：HVM をχ^2検定により比較した。

「具体的な活動」は、両プログラムに共通する要素である「ASE」「集団登山」「選択登山」「ビバーク」「ふりかえり」を採用した。「体験の意味」には、西田ら（2002）が自然体験活動における代表的な体験として明らかにした「自己判断・自己決定体験」「他者との交流体験」「自己内省・自己注目体験」「挑戦・達成体験」「自然・環境体験」に、Mean-End 研究において高頻度に報告されている「新しい体験」を加えた。「研修の効果」として、両プログラムに共通する目的であった「信義性」「積極性」「創造性」「行動力」「責任感」とした。

これらの項目を、岡村（2007）が Means- End 研究のために開発したラダーリング調査を用い、選択性で回答を得た。まず、最も効果があったスキルとして「効果」から最も当てはまるものを1 つ選択し、次ぎにその効果が得られた「活動」について選択し、最後に、その活動がその人にとってどのような意味があったのか「体験の質」を選択した。一連の回答を、それぞれの3 回まで行った。

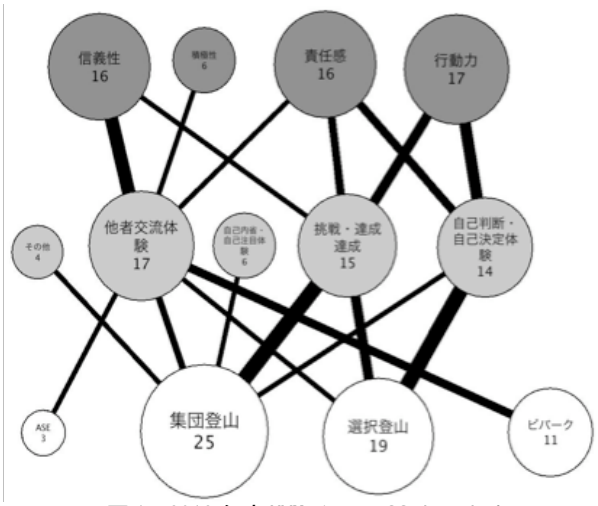

図 1. 2012 年度 HVM（cut off level=4）

結果及び考察

2012 年度から 63 件、2013 年度から 57 件の有効回答が得られた。それぞれの HVM を図 1、2 に示した。年度を要因としたχ^2検定の結果、「活動」に 5%水準の有意な効果が認められ（χ^2値=11.07, df=4）、残差分析の結果、2012 年度の「選択登山」が有意に高いことが明らかになった(F=2.37)。2012 年度の「選択登山」は、「自己判断・自己決定体験」に最も大きなパスが有り、その後「行動力」へと発展していた。さらに、有意差は得られなかったものの、2013 年度の「行動力」が回答の 10.5%に対し、2012 年度の「行動力」は 27.0%と比較的高いものであった。

2012 年度の選択登山の結果は、選択登山を用いた他の Means-End 研究とも、一致したものであり、ほぼ 1 日かけて、技術的、体力的に負荷のかかるコースを含む選択登山が、参加者に自己決定、自己判断の機会や挑戦・達成体験を与え、具体的に行動を起こすことのできる能力である行動力を特に高めることができると言える。一方、選択登山といえども、約 2 時間程度で、技術的、体力的に容易なコースでは、充分な学習の機会を提供できないと考えられる。

今後、より効果的な選択登山を各種研修に導入するために、選択登山の難易度、所要時間、コース選択方法の基準を明らかにするとともに、対象者の学習段階との関係も検証していく必要がある。

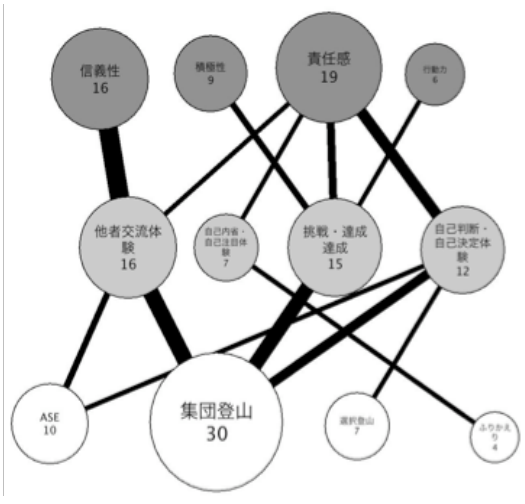

図 2. 2013 年度 HVM（cut off level=4）